

ルビンシュテインの発達論における内的条件

教育学研究室 福田 誠 治

Inner Conditions in the Theory of Development by S. L. Rubinstein

Seizi FUKUTA

S. L. Rubinstein settled a proposition of determination in the following formula: all actions are reciprocal, and outer causes are intervened by inner conditions, when those causes influence; all outer actions are refracted by inner characteristics of matters or phenomena, which are influenced by those actions.

His approach to basic problems from the conception of reciprocal actions and development, applying the formula of determination and the proposition of "reflection" to all psychological processes. He sought the psychological aspect of the development of mental activity, not the physiological aspect founded by I. M. Sechenov and I. P. Pavlov.

In this way, he pointed out inner conditions or characteristics. He emphasised that personality (lichnoschi) plays an important role. We study in his works how these inner conditions act, and how these are formed.

はじめに

- I 一般原則
- II 思考活動
- III 能力の発達
- IV 人格の形成
- V 内的条件の整理

はじめに

ルビンシュテインは、心理的なものの形成にも一貫して、次のごとく定式化した有名な命題の適用を試みた。

「あらゆる作用は相互作用であり、外的諸原因 (внешние причины) は内的諸条件 (внутренние условия) を介して作用する」あるいは「あらゆる外的作用 (внешние воздействия) は、この作用を受ける物体 (тело), 現象 (явление) の内的諸性質 (внутренние свойства) をとおして屈折される。」¹⁾

このように、決定論の原理を定式化することによって、心理過程の内的前提、内的条件の存在が改めて確認

され、注目がはかられる。さらに、多くの論者がしたように、外的なものとの法則性の存在と、内的なものを相対的に自立した系とみなすこと、すなわち内部矛盾と自己発達の法則の存在の根拠を読みとることもできよう。その結果、ルビンシュテインも強調していることであるが、相互作用を豊かに展開させるべき内的条件の形成が教育の課題として重視される。内的諸法則を知ることの意義は、それらを形成する道を発見することである。

そこで、ルビンシュテインの心理学に依拠しながら、内的諸条件がいかにはたらくかの論及をとおして、何が人間の活動を遂行する法則と力であるか、何が人格という統一体をつくるかという問題の一端を論述してみたい。

I. 一般原則

1930年代に、児童学批判をいわば最終決定として、発達における教育、すなわち社会的な外的作用の優位性が、教育学、心理学において確立した。ソビエトでは、

この立場は基本線であり、現在でも変わっていない。それは、ルビンシュテインが外的作用を外的原因と書いてることからもわかる。²⁾

50年代のパプロフ会議は生理学を復権させたが、ここにまたも機械的反射論との角逐が生じる。この過程で著されたのが、『存在と意識』(1957)、『思考心理学(原題:思考とその研究方法について)』(1958)、『心理学(原題:心理学の発展の原理とその道)』(1959)という一連の著作であり、ここでは、冒頭のごとく定式化された基本命題の心理過程への適用が追究されている。時あたかも、教育・心理学界では、コスチュークに始まりザンコフに終る発達論争の最中であつた。外的作用の優位を守りつつ、それに一元化されない道をルビンシュテインは探つたとと言える。

彼にあっては、心理学における決定論の原理は反映論の原理と結びついている。彼が反映論で述べようとした基本点は二点あつた。第一に、あらゆる現象、事物(предмет, вещь)は相互に作用しあい、相互に依存しあっている。そこで、ある外的作用は事物や現象の内的本性(природы)を条件づけ、さらにその中に蓄えられ、保持されるというものである。このことによって、ある現象や事物には、その現象や事物と作用しあう対象が「表示され」、反映される。第二に、作用の最終結果は、はたらきかける現象や事物によるだけでなく、この作用を受ける現象や事物の内的本性や、それに固有の内的諸性質(свойства)にも依存する。つまり、物質界には諸特質(черты)、少くとも形式的にせよそれと似たもの、意識が発達するための若干の端緒的前提があるというのである。³⁾

彼の言う二点は、前者は作用が常に相互作用であることを述べ、後者は作用が常に客体によって変形を受けることを述べている。もちろん、ルビンシュテインは、物質界一般について反映論を述べているのであつて⁴⁾、彼はそれが心理過程にも貫徹することを一つずつ示そうとしたわけである。こうすることが、観念論的非決定論と機械的唯物論(とりわけS—R理論)とに対決することなのであつた。

後者のこの屈折の命題は、冒頭のごとく定式化されるが、これとても一般的な基礎命題でしかなく、彼が「発端の公式にすぎない」⁵⁾と書いているように、これがいかにそれぞれの心理過程で現れるか、いかなる特別な形をとって貫徹するか、すなわち内的条件が屈折するその法則性を探ることが次の課題となる。

この命題は、心理過程に適用して、次のように言いかえられている。

「主体による客体の反映というそれぞれの行為(акт)は、決して客体の機械的再生ではなくて、多かれ少なかれその観念的な、つまり感情的(чувственное)、心的(мысленное)な意義のある変形(преобразование)である。」⁶⁾

さらに言いかえれば、心理過程は、人々の生活諸条件によって規定されつつ、人々の行動も規定すること、現実の反映でありつつ、「反映される諸現象の個体にとっての意義、個体の要求に対するそれらの関係」⁷⁾を規定するものである。

そして、適用した場合に注目すべきことは、無関係の力と力ではなく、外的作用に応じた反応が、内的論理を持って作用に介入すること、この内的論理に必要な作用を選択しながら相互作用をつくりあげていくという点である。このことをルビンシュテインはこう表現している。

「あらゆる有機体の一般性質、すなわちその内的諸特質は外的作用の影響の下に生じるのであつて単なるその投映(проекция)ではないということは、人格においてとくに明瞭にあらわれる。ある現象の固有の内的諸特質は、その現象が受ける諸作用の特殊な部分を選択的に(избирательно)条件づける。正にこのことによって、発達も、外的作用に条件づけられているにもかかわらず、自らの内的論理(логика)をもっているのである。」⁸⁾

このような適用に至るまでの論理過程を、ルビンシュテインの研究から思考活動、能力の発達、人格形成という主だった三点をとりあげて、内的条件の形成と、そのはたらきを検討してみよう。

II. 思考活動

ルビンシュテインが、その晩年に、決定論の原理をより具体化させようとして、実験も含め最も多くの研究を集中したのは思考の研究であつた。彼がとりくんだのが、「学習」ではなく「思考」であつた点は、注意を要するだろう。思考は試行錯誤や経験の濾過でもなく、概念や操作を身につけることだけでもなく、逆にまた内的操作のみに規定されるものでもない。ルビンシュテインによれば、思考はまさに認識過程の一つであり、人間的思考は「考える人間と、直接に感覚的に知覚される現実との相互作用」であり、かつ「考える人間と、ことば(слово)で客観化され、社会的に形成された知識体系、および人間が人類とするコミュニケーション(общение)との相互作用」⁹⁾という活動過程なのである。

そこで、彼はこの思考の過程を、事物や現象の関係、

本質をとらえる分析と総合 (анализ и синтез), 抽象と一般化 (абстракция и обобщение) の過程としてとらえる。¹⁰⁾ これは、ルビンシュテインが、セーチェノフやパブロフの理論に重ねるようにして心理学の法則性をとらえようとした現れである。¹¹⁾

機械的唯物論と違って、新しい唯物弁証法的決定論と彼が呼んだ、前節で詳述した彼の基本命題は、ほぼ1955年にでき上っていた。彼が考えるには、パブロフが外的相互関係を解明できたのは、大脳皮質の内的法則たる拡張と集中の法則と誘導法則を明らかにしたからに他ならない故に、思考活動の内的法則性 (закономерность) を明らかにしなくてはならない、と彼は課題を提起する。¹²⁾ すなわち、パブロフは、大脳皮質の反射活動を「刺激の分析と総合、分化と般化 (дифференцировка и генерализация)」ととらえた¹³⁾ ということから、神経法則に類比させながら思考過程を「分析と総合、抽象と一般化」ととらえるようになったのである。そして、注目すべきことは、1957年に思考心理学の研究から「総合を介しての分析」¹⁴⁾ という法則性を導き出している点である。

このような段階を経て、彼の思考研究が結実した。

知識を持ちながらも、証明問題の解けない生徒がいるが、それはなぜか。この多くの教育者が接する問いに彼もまた接した。その際、彼は思考の研究方法を、(1) 解法を補助問題から転移 (перенос) する可能性、(2) 適当な知識 (定理) を現実化する可能性、(3) 分析の不足環を内包するじかの「助言」を利用する可能性、の三点を明らかにすることと選び出している。¹⁵⁾

問題解決の思考過程は、問題事態 (проблемная ситуация) の分析から始まる。つまり、具体的、個別の問題の分析から始まる。この分析とは、「与えられているもの (данное)」と「求めるもの (искомое)」：問題の条件と要求 (требования) の相互関係を分析することである。ただし、この分析は「総合行為」であり、問題の要求、つまり解決しなければならない点を考慮しながら必要条件を抜き出していくことである。問題の条件と要求との相互の関係づけの枠内で、その助けによって分析が行われること、言うならば、「総合を介した分析」が起きるのである。

こうして得られたある段階の分析結果と、まだ未遂行のまま残されている問題の要求との相互関係がつくられ次の段階の分析行為が始まる。分析の客体は、「新しい関係の中にはいり」、それによって「新しい概念として定着する一層新しい質 (качества)」でたち現れる。こうして客体から「新しい内容」が汲みつくされ、「新しい性質」が概念として定着する。たとえば、角の二等分

線と分析された直線が、証明に用いるべき定理に必要な中線とみえたり、垂線とみえたりして特徴づけが変更される。ただ見ているのではなく、既知の知識 (定理) を使うに必要な性質を分析しながらみてとるわけである。

まずここで、ルビンシュテインは、この新しい相互の関係づけを「定式変え (переформулировка)」と呼んでいるのであるが、それには、人間的な社会・文化性の役割の確認がみられる。というのは、それが言語でなされることから、また概念的な特徴づけが「科学的知識という社会的・歴史的発展の所産」のはたらきでなされることから、「定式変えと分析 および 総合との相互連関は、思考のダイナミックスにおける言語 (язык), コトバ (речь) および思考の統一、ならびに相互連関の内容豊富なあらわれ」¹⁶⁾ であると解する。

次に、思考過程において総合を介する分析という形式をとって、「問題事態をいろいろの文脈の中で検討する」すなわち、「客体を新しい関係のなかにひき入れて、新しい局面をあばく」という主体の働きかけがとりわけ重要なことがこれで示される。既知の知識 (定理) のどれがあてはまるかを、全体像を描きながら分析し、いろいろに検討して、課題に適しているもの、解決を可能にする知識 (定理) を選びながら、同時に知識 (定理) を適用するに必要な性質を分析によって抜きだしていくのである。これは、相互作用に他ならない。

偶然にみえる「洞察」も「思考過程の進行全体によって準備され条件づけられる」ものであり、問題解決のために外から導入されたかみえる「定理」も、実は「問題の分析によって内部から生じる」のである。この外から知識や原理や定理をひき入れるまでに高まった状態、これをルビンシュテインは、それらを導入する「内的条件」¹⁷⁾ と言い、問題分析のためには必要なものと考えている。これが、先に示した思考の研究方法の第二項、第三項の答としてでてきているものである。

第一項の「転移」の可能性の答は、ルビンシュテインにあっては、分析・総合と違うレベルである、抽象・一般化のレベルで与えられている。まず、「あらゆる思考は一般化のなかで行われる」のであるが、その一般化には、「異なる現象、事態のなかで共通なもの (общее) を相互に関係づけて抜きだす」という「経験的一般化」と、「本質的諸側面とそれらの相互連関を分離する」という「科学的一般化」という二つの形式がある。ところが、現象の本質的な性質、側面、相互関係をぬきだすのは分析という行為であるから、一般化は分析に依存する。¹⁸⁾ 問題解決の際に、問題の要求と条件が相互に関係づけて区別されていれば、解決に一般性が生まれ、解決を新し

い条件に転移できるわけである。つまり、分析が深く、一般化が広げれば、それだけ転移の可能性は大きくなる。一つの問題から別の問題への解決の転移には、分析の結果両者のあいだに本質的な共通点 (общее) を明らかにすることが、この転移の「内的条件」¹⁹⁾ である。逆に、この際、問題の分析は、「概念の中に定着された一般化」によって条件づけられるのであり、個人が身につけた一般化された概念は転移においても一役かう。

以上のごとく、問題の思考的解決の際に、外からの与件 (данные) を利用するためには「それに応じた分析、総合および一般化という過程の法則性によって規定される内的諸前提 (предпосылки) が存在しなければならない。」²⁰⁾ ルビンシュテインは、このようにして、先に示した思考の研究方法にある三つの可能性は、どれも、問題の分析を生徒が自分でどれだけ進めたかに依存すると結論づけて、「それらはみなそれに応じた内的前提、内的条件の存在を予想する」²¹⁾ と解釈するわけである。

ここまできて、ルビンシュテインは、冒頭の決定論の命題を更に進めて「思考の発端となる (исходный) 外的客観的諸条件と思考の諸結果との関連 (связь) は、思考過程の内的条件、法則的経過によって媒介される」²²⁾ と書き直す。この内的諸条件として彼が挙げているものが、以上述べてきたことからほぼ推測できるように、「転移の際の分析作用の程度」、「助言を利用する際の分析の進歩度 (продвинутость)」、「基本問題と補助問題を関係づける段階」というものである。そして、この進歩度は、「その個人の能力 (способность)、以前に獲得された知識、類似の問題を解決した経験、さらにどれだけかは、これらの現実化を促進させたり遅滞させたりする動機づけ (мотивация) を含んでいる」²³⁾ と分節化してとらえられている。

ここに動機づけが数えられていることに、われわれは注目したい。それは、思考の過程は「認識する主体」²⁴⁾ によって担われているからである。ここに注目したという点こそ、ルビンシュテインのなした大きな貢献であろう。

まとめのためにくり返せば、思考過程では以前に獲得した知識 (定理、公理なども) のうち解決に適した (応じた) ものを**選び**ださなくてはならない。それは相互作用しつつある客体から、分析と総合、抽象と一般化という法則性をはたらかせて、選択的に何かをとり出し、認識していく過程と同時に生じる。適したという意味で、また客体からという点で、思考は客体に依存する。だが、やはり内的条件が相互作用に介入しながら、かつ豊かになっていく。そしてまた、この思考の過程を遂行してい

くには、まさに「総合を介した分析」という選択的な行為をしなければならないが故に、単なる主観でなく、「認識する主体」を必須のものとしているのである。

最後に、内的条件を問題にする意義について検討してみよう。ルビンシュテインは、内的条件の究明は教育にとって実践的な意義があると、はっきり表明している。というのは、生徒が「更に分析を進めるための手段」、「自主的な思考活動を更に続けるための内的条件」という思考の前提、思考遂行の「環」を教師はつくりだせるというのである。そうすることによって、まさに「考えることを教えこむ (научить мыслить)」²⁵⁾ ことができるのだ。思考過程の内的条件を明らかにすることから、「新しいものを発見することのできる真の思考」を生徒のなかに生み出す手がかりがつかめるとしている。

III. 能力の発達

ルビンシュテインは、能力 (способность) の発達を人間の発達の中心概念に据えている。彼にあっては、他と違って、固有に人間の発達を問題にすることは、すなわち能力の発達を問題にすることに他ならない。逆に、能力の発達を問題にすることは、人間の発達を問題にすることであって、人間の作り出した物の「発達」を問題にすることではない。そして、この能力の発達とは、蓄積ではなく、質的飛躍を伴う発達そのものなのである。²⁶⁾ 彼は、とりわけソビエトの内化理論²⁷⁾を批判しながらこう考えたのであるが、それ故に能力の規定性の問題が決定的な対立なのであり、問題解決の出発点とされる。

彼の見解はこうである。第一に、能力は単純に外から植えつけられるのではなく、何ものも発達の内部条件なしに外から発達の過程の中に入ることはできないのであり、「個人には有機体の成長にとっての前提や内的条件が存在せねばならない」²⁸⁾ のである。第二に、能力は個人の内部に予め予定されていたり、出来上がった形で発達する以前に、また発達の外で与えられるのではない。能力はまさに発達するのである。言いかえれば、外的条件の変化が能力を発達させるのではあるが、能力は外から作られるのではなく、内に発達するのである。²⁹⁾ ルビンシュテインはここで、一方は生得説を、他方では機械的唯物論 (内化理論もその一つ) を敵として対決したのである。

さて、もう少し立ち入って一般命題の適用をみていこう。

まず、「人間と対象的世界は、その相互作用においてみるべきであり」、能力の発達の問題は、「人間自身、そ

の固有の本性、その能力の内的発達と、その活動の客体化された所産との相互関連、相互依存性から出発しなければならない³⁰⁾のである。ここで重視すべきことは、この人間のなす相互作用は、創造という側面を含むという点である。「人間の能力は、歴史的発達の過程において人間によって創造されてきた所産を習得(усвоение)する過程だけでなく、その所産を創造する過程においても形成される。」創造するという活動性がこれで重視される訳である。

では、能力の発達の内的条件は何か。「人間の能力は、その人間の発達の内的条件であり」、それは「外からの作用の下で、人間と外界との相互作用の中で形成される」のだが、かつまた、それが「今後の発達のための、より高いレベルのための新しい可能性」をひらく内的条件となるのである。このことから、「能力の発達はらせん的に起る」と表現される。

ここで、ルビンシュテインは注意を無条件反射に向ける。能力の神経学的基礎は条件結合系たる反射の機能的結合系であるが、これは正しい。しかし「客観(объект)がこの系に作用する効果の特性を媒介している、内的条件としての無条件反射の基礎を見落すべきでない³¹⁾」と彼は強調して言っている。

このことから、従来、能力発達をめぐるルビンシュテインの所論の中で、その発達の前提として自然的なもの、および脳の生理学的構造、神経類型を強く読みとる向きがあった。これらこそ発達の内的条件であるかのごとく解され、天才音楽家などの存在がその証明とされた。確かに、ルビンシュテインはそのようなことを言っている。しかし、これは彼の理論の弱点であり、彼はこの点では一貫して追求すべき相互関係の把握に失敗していると言わねばなるまい。

彼の原則的立場は、次のごとくである。専門的能力(音楽家、数学家などの)は、従来心理学では個人的特殊性として扱われ、出発点となる人間の自然的(природные)諸性質から切り離れ、すべての人びとに共通の「類的」性質の研究から切り離されていた。脳、神経系、有機体の形態学的構造の固定された特殊性に存する素質(задаток)が、それぞれの能力にとって予め用意されているという心理形態学説は、反動的な能力問題の解釈である。これでは「複雑な形成物としての能力が、有機体の形態学的特殊性のなかに直接投射されてしまう³²⁾」ではないか。そうではなくて、能力は心理活動が一般化され、具体的な種類の心理活動が一般化された様式となる際になされる「行動や活動を調整する心理過程(『活動』)が定着した結果³³⁾」に他ならない。能力は、あ

くまで活動の結果なのである。たとえば、音楽的能力の形成の基本的な行為(акт)は、「彼の発達過程で選択された音楽作品の構成の様式」が、彼の「聴覚のうちに定着」され、彼の「『自然的な』資産に転化³⁴⁾」することなのである。

一般的に、心理過程は、一面からみれば能力の所産(たとえば聴覚)、もう一面からみれば、反射的連関の常同化された体系という形をとる「自然的能力³⁵⁾」を形成する。この構造は、ちょうど、ルビンシュテインが追究しようとした心理学的法則と、セーチェノフやパブロフが解明した生理学的法則という構造に同じものである。誤解してならないことだが、彼の言う「自然的」とは、言わば自然科学的にみたレベルでという意味で、これは相の違いを述べているにすぎず、「生まれつき」を意味するものではない。彼は「自然的」という概念でもって、条件反射を組織することにより教育可能なものとよみ変えることを促しているものであり、この点は積極的に評価できるものである。

しかし、彼が、能力の発達を条件づける「遺伝的(наследственные)諸前提³⁶⁾」を認め、「発達の自然的諸能力³⁷⁾」を認め、あるいはまた、高次神経活動の諸性質を能力形成の「生理学的内的条件³⁸⁾」と呼び、同様に「その人の能力が自然的与件に、その人の脳の皮質活動の性質に依存していないと結論してはならない³⁹⁾」と述べる点には、実は宿命的に予定された前提がすべり込まされているのである。要は、この前提が能力形成にあたって、どのように、どれほどにかかわるか⁴⁰⁾という点なのである。能力が形成され、それが今度は人間の活動を条件づけ、その活動が高い水準の能力を形成する(らせん的な発達)。こうしてますます高い水準に達していく能力において、神経類型や脳の生理学的構造がいかににはたらいていくかを、ルビンシュテインは説明できていないのである。従って、ルビンシュテインを根拠にして、それらを内的条件としてとりあげることは肯定的意味を持ち得ないといえる。

IV. 人格の形成

ルビンシュテインは、人格(личность)という概念を、身体を持ち、現実の世界に生き、社会的な生活をしている個人的人間という意味で用いている。⁴¹⁾

彼がこうとらえようとした意図は、観念論や機能心理学を克服することにあつた。すなわち、観念論および機能心理学は、主体として人間をおかず、その代りに意識、思考、精神という諸機能をおいているからである。

ここでは人間は解体され、人間の心理がとらえきれないから、彼の意図は積極的な意味を持っている。だが、逆に、このことによって人格概念を広げてしまい、焦点をぼかしてしまっている。

さて、冒頭の決定論の命題を人格においても適用するとどうなるだろうか。ルビンシュテインは、それを

「その心理現象の説明にあたっては、人格は、あらゆる外的作用を屈折させる、内的諸条件の一つに結びついた総体としてたちあらわれる」⁴²⁾ とか、

「外的作用は人格に媒介されて、その心理効果と関連する」⁴³⁾ とかと表現している。

このことから、われわれは、心理現象の結果を問題にするためには、人格も考察しなくてはならないのだと論を進めることはできる。その意味では、心理諸過程（知覚、思考および感情など）の完全な研究には、「それぞれの活動に対応した『人格的な』相、およびとりわけ機能的な相も含まねばならない」⁴⁴⁾ という彼の立場は承認できるものである。

ところが、ルビンシュテインが、「内的諸条件の全一的総体としての人格 (личность как целостная совокупность внутренних условий)」⁴⁵⁾ とも書いていることから、以上の引用を根拠として、人格を内的諸条件の総体であると解する論者が多くみうけられる。この帰結は、人格を規定するために無限定に内的条件を数えあげるという「心理学主義」を招いてしまう。問題は、人格という統一体をつくりあげている本質の把握であり、これなくしては人格の構造化という課題も意味を失うのではないだろうか。⁴⁶⁾

これは、以下にみるように、ルビンシュテインの人格把握が構成的であることにも帰因している。⁴⁷⁾ ルビンシュテインの目的は、人格の形成についても決定論の命題を貫徹させることにあった。そこで、彼は、心理学の俎上にのせるために、「本来的に人格的な性質」を抜き出す。それは、「人間の社会的に有意義な行動または活動を条件づけるもの」と定義し、主要なものを、「ひとびとが自ら提起するもろもろの動機と課題の体系」、「ひとびとのふるまいを条件づける性格 (характер) の諸性質」、および「彼らを歴史的に形成された社会的に有用なる活動の形態に適合させる性質」たる「人間の能力」とあるとした。⁴⁸⁾ 大きく分けると、「性格」と「能力」という二つの心理性質が人格的な性質ということになる。⁴⁹⁾

能力については前節で検討を加えてあるので、性格の決定論についてここではみてみよう。彼の説明によると、外的なはたらきによって規定されるものが、「事態的な動因 (побуждения) や動機」とまず呼ばれる。具

体的な個々の状況で与えられる動因や動機という形で、「臆病な人間も、事情がかりたてるときには勇敢にふるまうことができる」⁵⁰⁾ というように外から与えられる。これが類似した事態に拡張され、普遍化され、「常同化される」ことによって、ある個人の「人格的な」動機や動因に移行する。性格の性質は、同じ条件の場合に、この人間に法則的にあらわれる傾向 (тенденция)、動因、動機などでもあるから、こうして性格を形成することができる。

以上のごとく決定論の命題を貫徹させることで、次のごとく表現されている人格の規定性が理解される。

「人格はとりまく世界、社会的環境、他の人びとに対する自己の関係によって規定される」のであり、

「これら諸関係は、ひとびとの活動のなかで、すなわち、ひとびとがそれによって世界を認識し（自然と社会を認識し）かつこれを変革するという、現実的活動のなかで実現される」⁵¹⁾ のである。

ルビンシュテインは、人格がつくられることを主張する。そしてこれには積極的な意味がある。ただし、ここでもまた気づくことであるが、彼が、内的条件と外的条件の相互作用をうまく説明しているとはいいがたい。屈折の様子はほとんど把握されていない。人格を内的諸条件の全一的総体と理解するということは、人格性質が個人の内に宿命的に存するというのではなく、その人間の社会的な活動のなかで形成もされ、また逆に、その人間の行動に影響を及ぼすということを理解すべきことを意味しているにすぎない。すぎないのではあるが、人格を発達の視点でとらえるべきこと、人格たる内的諸条件がいかなる役割を演ずるかを発達的に考慮する道を拓いたという点で、大きな功績は認めざるを得ないだろう。

最後に、どの教育者も理解しているようでむずかしい問題を、興味ある形でルビンシュテインが理論づけているのでみてみたい。人格の場合、注目すべきは人格の形成史だと言うのである。一般的に内的諸条件はそれに先行する外的相互作用に依存して形成されるのだから、人格もまた、当然に、人間が周囲の世界とともにする相互作用のなかであられるだけでなく、形成されるもする。すなわち「人格に対する外的（教育的なものもいれて）諸作用の心理学的効果は、人格の発達史によって条件づけられる」⁵²⁾ という点を重視している。そして、さらに、ルビンシュテインは、人格の構造を条件づける歴史を「生物の進化過程」、「人類本来の歴史」、「その人間の発達史」と分けて考えている。

教育にとっては、文化や政治体制などの差違、家庭や友人関係などの差違が、教育効果を変えるということは

大きな問題である。「同一の外的条件も、本質的には、個人にとっての生活的意味によって異なるものとして現れる」⁵³⁾ というルビンシュテインの指摘は、個々人の発達に即した外的条件が多様であるべきことをわれわれに確認させる。

V. 内的条件の整理

ルビンシュテインは、内的条件とは何かを、体系的に構造化して論じているわけでない。しかし、ここまで紹介してきたことからほぼ見当はつくであろう。そこで、確認してから進みたいのだが、われわれが問題にすべきは、内的条件の全体記述ではなく、子ども、青年の発達にとって中心的な軸を形成しているものなのである。何かがその軸を形成するかは、内的条件が子どもの諸活動のなかで果たしている役割を動的にとらえることでしか明らかにならないだろう。⁵⁴⁾ そうすることによって、内的条件の適切な活性化と変化という教育的・実践的意義が見出されてくるものである。

そう確認して、あえて静的に整理してみよう。

a. 発達的前提

内的条件が発達的前提であるという意味は、内的条件を土台 (основание) と言いかえてある部分⁵⁵⁾ から推測しよう。他に「土壌 (почва)」⁵⁶⁾ という表現もこれに通じるものと思われる。

b. 自然的なもの

これをとりあげて有効に論を展開しているわけでないが、一応ルビンシュテインは重視している。

「内的諸条件の重要な生理学的要素を構成するものは、神経系の諸特性」⁵⁷⁾ である。

「この内的諸条件の最も重要な生理学的成分は、神経系の性質である。チェプロフによるこの体系的研究は……真に心理学的有効性をもっている。」⁵⁸⁾

思考の内的条件は「生理学的相も心理学的相ももっている。」⁵⁹⁾

c. 前提知識

ただ知識というだけでなく、問題に応じた知識で、まさに適用されんとしている状態をさす。ルビンシュテインが唯一動的な表現に成功している部分だろう。

「外から与えられた与件を適用する……分析・総合などの法則性に規定される内的条件」⁶⁰⁾

「自分の前にだされた課題の分析を自分でどれだけすすめたか……内的前提、内的条件」⁶¹⁾

「課題そのものに加わる分析……それに対応する知識、公理、定理を導入するための内的条件」⁶²⁾

「解決すべき問題事態または課題の分析の状態」⁶³⁾

「分析の結果として共通点を明らかにすることが『転移』の内的条件である」⁶⁴⁾

「問題分析の進歩度」⁶⁵⁾

d. 内なるものすべて

外的作用に対するあらゆる「反作用」、相互作用のもとでのあらゆる変化の内的諸条件とは、その相互作用のもとで「科学的に表現された『本質』」⁶⁶⁾ である。これは、現象、事物の「固有の内的内容」⁶⁷⁾ という意味である。

人間において内なるものすべてとは、人格面の強調を意味する。

思考の内的条件には、「思考する主体の人格的諸性質、すなわち、課題に対する一定の関係においてあらわれてくる彼の動機、態度、これまでの経験ならびに知識と能力という性質も含まれる。」⁶⁸⁾

e. 主観的なもの、思想や感情

従来、彼からこの点をひきつぐべきとする論者が多かった。それは正しいが、相互関係の説明が次の課題として残されている。

「あらゆる効果的な教育活動は、被教育者独自の道徳的活動を自己の内的条件とする。」⁶⁹⁾

「高次神経活動の性質、個人の構え (установка) 等々も内的条件のなかに含まれる。」⁷⁰⁾

「心理現象、心理性質、それに人格の状態も内的条件のなかに含まれる。」⁷¹⁾

「世界感覚 (мировоззренческие чувства) は……内的条件として現れる。」⁷²⁾

f. 屈折させるもの

この屈折現象の背後にあり、それを生みだしたもの。

以上六点にわたって内的条件の定義づけを整理してみた。もちろん、それらは重なるものもある。われわれが今後追求すべき点は、それらが重なりあいながら相互作用をつくっていく、諸性質を統一する中心軸は何かという問題であろう。その際、ルビンシュテインが心理過程を担うものを人格という人間全体に視野を広げたことから、教育の営みの広さをもまた考えさせられる。

(接導教官 堀尾輝久助教授)

注

以下、エス・エリ・ルビンシュテインからの引用は、『存在と意識』(青木書店, 1960, 1961), 『思考心理学』(明治図書, 1962) 『心理学(上), (下)』(青木書店, 1961, 1970) による。原文は、それぞれ次のごとくである。С. Л. Рубинштейн Бытие и сознание. М., 1957. О мышлении и путях его исследования. М., 1958. Принцип и пути развития психологии. М., 1959. 他に論文集として Проблемы общей

психологии, М., 1973. が用いてあるが、これば П. О. П. と略されている。

- 1) 存在と意識, 22ページ。思考心理学, 8ページ。心理学, (上), 29~30ページ。「介して」とは、原文で *через посредством* とあり「媒介を通して」の意味だが、単に *через* とある箇所 (思考心理学, 195ページ, *стр.* 135) や「媒介されてのみ (*лишь опосредствованно через*)」(同, 11ページ, *стр.* 8) という記述もみられる。
- 2) 次のような記述もある。「外的条件と内的条件との相互連関においては、外的条件が主要な役割をはたす。」(思考心理学, 11ページ; 存在と意識, 422ページ)「出発点となるのは外的条件である…」(思考心理学, 30ページ; 心理学(上) 77ページ)。

従って、次のように念を入れて説明している部分もみられる。「内的諸条件 (それ自身が外的作用の結果として形成される)」「存在と意識, 310ページ」「内的諸条件 (外的作用に依存して形成される)」(同, 22ページ)。
- 3) 存在と意識, 22~25ページ。心理学(上), 29~30ページ。
- 4) レオンチェフは、このルビンシュテインの「外的原因は内的諸条件を介して作用する」という定式を、「疑いもなく正しい」とした。しかし、「もし内的諸条件が作用をうけている主体のその時の状態を意味するものならば、この定式は $S \rightarrow R$ 図式の中に、原則的に新しいものは何ももちこんでいない」、「無生物でさえ」そうではないか、と反論する。(А Н Леонтьев Деятельность, сознание, личность. М., 1975, *стр.* 76.) このレオンチェフの意図は、特殊人間的な法則こそ追究課題なのだという主張にある。

レオンチェフの批判するように、内外二元論の図式を残しながらも、ルビンシュテインの出発するところはその相互作用であって、決して $S \rightarrow R$ から出発しようとしているのではない。問題を、相互作用をいかにとらえるかという点に進めた方が論争を有効に展開できる。ルビンシュテインにあっては、屈折という点にこれが凝縮されているが、教育においては、子どもや青年の発達を課題にするから、この屈折するという過程こそがまさに重要なのではないだろうか。
- 5) 心理学, (上) 141ページ。
- 6) 心理学(上), 60ページ。
- 7) 存在と意識, 247ページ。
- 8) 思考心理学, 11~12ページ。引用部分の第二文には次のような注がつけられている。「周知のごとく、全感覚器官には、特殊な様式で反応する、特殊で、それに適した (адекватные) 刺激が与えられる。それは、あらゆる一般的な法則性の特殊な発現様式である。」
- 9) 心理学(上), 78ページ。また「思考は、本質的には人間が直面している問題または課題の解決をもたらす認識である」(思考心理学, 19ページ) とある。
- 10) 彼が思考のこのような側面をとりだしてきたのは、二つの起源がある。一つは、セーチェノフ、パブロフの理論であるが、もう一つは、18世紀ドイツ哲学と19世紀形式論理学の影響である。後者は、彼の『一般心理学の基礎』を見れば確認できよう。この第11章「思考」を、彼は次のような内容で記述している。

対象を最も適切に認識するために、思考は多くの操作 (операции) を手段として構ずる。これら基本操作が、比較と分類、分析と総合、抽象と一般化に他ならない。こうして最も本質的な関連、関係が解明される。(С. Л. Рубинштейн Основы общей психологии, I-е 1940,

стр. 296-299) ここで、運動する内的対立という発達法則として思考を弁証法的に体系的に把握しようとした彼の試みは、残念ながら成功しているとはいいがたい。たとえば、分析と総合の関係は、「…分析と総合は互いに分かちがたい。総合なき分析は欠陥がある。総合の外で分析を一面的に適用しようという試みは、部分の総和という全体の機械的な解明をもたらす。全く同じように、分析なき総合は不可能である。なぜなら、総合は、分析が分けた諸要素の本質的相互関連において、思考の中で全体を復合するのだから。」とあるにすぎない。

なお二版 (1946) でもこの部分はほとんど同じ記述である。ただ後者では、教授-学習 (обучение) に言及した一節が加えられていてこう書かれている。「心理学研究の対象である個人の思考活動においては、一般化の過程は、基本的には、先行する歴史的発展によって創造された概念 (понятие), ことば (слово) や科学的用語 (термин) に定着している一般的表象 (представители) を獲得 (обладание) するための教授-学習に媒介された活動としてつくり上げられる。」(*стр.* 357)

ここでは、分析と総合が「内的法則性を解明する」とはとらえられていない点に留意されたい。レオンチェフらとの積極的な差もまだでてこない。

- 11) この点、同じ思考を扱って、レオンチェフは同じように記している。「思考とは、人間の認識の最高段階をなす、客観的实在の反映過程である。……思考は、現実の直線的でない複雑に媒介された反映をもたらす。……思考にそなわっている直接的・感性的認識の限界を越える能力はなにによるのかというと、実践的経験のデータ (данные) と、すでに持っている知識、概念という形の思考活動自体の所産たるデータとの能動的な関係づけが、思考活動の過程において起きるからである。」(思考, 1964, 『認識の心理学』, 世界書院, 125ページ, 傍点は福田)。

だが、まさにこの、いかなる能動的な関係づけが、どのように起きるか、かつどう起こすかこそがわれわれには問題なのである。この点で、レオンチェフとルビンシュテインの差が出てくる。レオンチェフは、セーチェノフ、パブロフの理論にある分析・総合を、定位・探索活動と解してとりいれているのであり、彼の言う能動的 (активный) が、対象に定位された、コミュニケーションに適したという意味で用いられているのである。(このことは、『認識の心理学』111ページ, 53ページと合わせて考えるとよく理解できる。)

- 12) С. Л. Рубинштейн Вопросы психологической теории, «Вопросы психологии», No. 1, 1955, *стр.* 12. 同じく、思考心理学, 9~10ページ。
- 13) 心理学(下), 69ページ。概念や言語によるものを「一般化」、それに至らぬもの、とくに生理的な興奮の拡張をもたらすという意味では「般化」と使い分けられている。
- 14) Его же. Принцип детерминизма и психологическая теория мышления, «Вопросы психологии», No. 5, 1957, *стр.* 65.
- 15) 心理学(上), 91ページ。なお第二項は、レオンチェフらの影響下にあるランダのアルゴリズム研究と、第三項は、ヴィゴツキーの発達の最近接領域の概念と比較して興味ある。
- 16) 心理学(上), 96ページ。
- 17) 同, 119ページ。
- 18) 同, 128-129ページ。固有な性質を選別するのが分析で、付随的な事象を排除することが抽象であるが、本質的なものと非本質的なものとを分離すれば両者は一致する。

- そこで、「科学的一般化は、抽象と結びついた分析の派生的な効果である」(存在と意識, 201ページ)とも書かれている。
- 19) 心理学(上), 133ページ。
 - 20) 同, 138ページ。同じ意味の記述が, 思考心理学, 119ページ, にもある。
 - 21) 思考心理学, 121ページ。
 - 22) 心理学(上), 139ページ。
 - 23) 同, 143ページ。
 - 24) 思考心理学, 26ページ。
 - 25) 同, 204ページ。
 - 26) よく引用される部分, 「人間の発達には『経験』の蓄積や, 知識, 技能(умение), 習熟(навык)の獲得とは違って人間の能力の発達であり, また人間の能力の発達は, 知識や技能の蓄積とは違ったものたる発達そのものである」(П. О. П., стр. 221.) は, そのことを言っている。
 - 27) ルビンシュテインの内化理論の理解は狭く, 一面的である。
 - 28) П. О. П., стр. 221.
 - 29) ルビンシュテインが能力を人間個体内のものとして考えている点は疑いない。「能力とは, 個人の中に定着した, 一般化された心理活動の体系である。」(存在と意識, 401ページ; 心理学(上) 176ページ)。
 - 30) П. О. П., стр. 223.
 - 31) П. О. П., стр. 228. 同様に, 存在と意識, 395—396ページ。
 - 32) 存在と意識, 398ページ。
 - 33) 同, 401ページ。
 - 34) 同, 406ページ。
 - 35) 同, 400ページ。
 - 36) 同, 398ページ。
 - 37) 心理学(上), 170ページ。前後を引用すると, 「歴史的な人格を凡人から隔てる距離というものは, 彼らの自然的諸能力だけの相互関係によって決まるのではなく……彼の発端の(исходные) 自然的諸能力によるばかりではなく……。」邦訳では, 自然的とされず「生れつき」と訳出されているが, こればルビンシュテインの真意を伝えていない。
 - 38) 存在と意識, 399ページ。
 - 39) 同, 417ページ。ここでも, 自然的でなく「生れつき」と訳されている。
 - 40) 他ならぬレオンチェフの能力論は, 人間的能力が, この前提との間にはるかに大きな距離のあることを主張しているのである。(たとえば, О формировании способностей, «Вопросы психологии», No. 1, 1960.)
 - 41) 「人間(人格)」(心理学(上), 65ページ)と言いかえたり, 「人格概念によって示される客観的実在とは, 要するに実在的個人, 生ける, 活動しつつある人間である」(同, 171ページ), 「人間に個性(свое лицо)があるから, 人間は人格なのである」(同, 172ページ)と記している。
 - 42) 存在と意識, 422ページ。思考心理学, 11ページ。心理学(上) 16ページでは, 「……人格の諸性質や状態は, ……」となっている。
 - 43) 心理学(上), 166ページ。
 - 44) 同, 173ページ。
 - 45) 存在と意識, 422ページ。心理学(上), 165ページ。心理学(上), 190ページには「あらゆる心理過程の内的諸条件のまさに総体としての人格」とある。また, はっきりと「人格を内的諸条件の全一的総体としてとらえる」(П. О. П., стр. 241.) と書いてある箇所もある。
 - 46) レオンチェフの批判もここにある。「外的なものは内的なものを介して作用するという事は正しい。……だが, この命題に内的なものを人格だと解釈することへの鍵をみるならば, 話は別である。……これによっては……固有な統一体(особая целостность)としての人格の出現は解明されない。」(Деятельность, сознание, личность, стр. 181.)
 - 47) この特徴は, 人格の心理学について説明した次の記述がよく示している。「重要なのは, 人間が心理的性質のいかなる『項目表』を持つかということだけでなく, これらの性質のおおのが, この人格の一般的構造のなかでいかなる役割, つまり主導的役割あるいは副次的役割をはたすかという点である。」(心理学(下), 175ページ)。
 - 48) 心理学(上), 168ページ。
 - 49) 同, 175—190ページ。次の記述が, このことを確認させる。「人間の複雑な心理的性質は二つの基本的グループ, すなわち性格学的性質と能力を形成する。前者は行動の心理的調整の鼓舞的(動機的)側面と結びついており, 後者はその組織的一執行的側面と結びついている。」(存在と意識, 397ページ)。
 - 50) 心理学(上), 187ページ。
 - 51) 同, 170ページ。
 - 52) 存在と意識, 422ページ。心理学(上), 167ページ。同様に, 思考心理学, 12ページでは, 「人格の発達史」を「発達の内的法則」と同列に記している。
 - 53) 存在と意識, 423ページ。心理学(上) 168ページ。
 - 54) このことは, ルビンシュテインも内的条件の特徴づけで考慮している。彼は次のような三点にまとめている。
 - 1) 外的作用の受動状態それ自体は, 内的条件, すなわち作用が及ぼされる人や物の本質的な特殊性に条件づけられる。
 - 2) 内的条件は何らかの状態であるのみか, 何らかの過程でもあり, その進行中に内的条件は変化する。
 - 3) 新しい諸結果は過程の進路のなかに入って, その過程を経過させる内的条件を変える。(心理学(上) 141ページ)。
 - 55) 思考心理学, 195ページ。存在と意識, 185ページには「内的土台」とある。また「現象発達の土台である内的条件」(«Вопросы психологии», No. 1, 1955, стр. 8.) という記述もある。
 - 56) 心理学(上), 192ページ。
 - 57) 同, 165ページ。
 - 58) П. О. П., стр. 242.
 - 59) 思考心理学, 19ページ。
 - 60) 同, 119ページ。心理学(上), 138ページ。
 - 61) 思考心理学, 121ページ。
 - 62) 同, 189ページ。
 - 63) 同, 201ページ。
 - 64) 心理学(上), 133ページ。
 - 65) 同, 142ページ。
 - 66) 存在と意識, 185ページ。
 - 67) 同, 184ページ。
 - 68) 思考心理学, 198ページ。
 - 69) 心理学(上), 192ページ。
 - 70) 存在と意識, 422ページ。
 - 71) П. О. П., стр. 242.
 - 72) П. О. П., стр. 352.